

京都大学総合人間学部広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

フィールドで出会った言葉.....	杉万 俊夫.....	2
総人と人・環への想い.....	カール・ベッカー.....	4
‘I can’t stop loving you’ と「ランテルナシオナル」の間で.....	富田 恭彦.....	6
旧教養部キャンパス建物異聞.....	東郷 雄二.....	8
新・魔女たちへのバラードに寄せて.....	前川 玲子.....	10
激動のワンダーランドで過ごした 34 年 6 ヶ月.....	稲垣 直樹.....	12
「社寺」見学会 23 年.....	西山 良平.....	14
中央館のこと.....	阿辻 哲次.....	16

連載企画「総合人間学とわたし」

総合人間学愚見.....	安部 浩.....	18
枠のない場.....	塩塚秀一郎.....	20
学問連携へのささやかな試み.....	加藤 眞.....	22

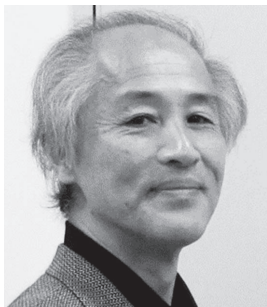
外から見た「総人・人環」

第二のふるさと吉田南.....	岡田 敬司.....	24
-----------------	------------	----

特集 ご退任を迎えられる先生方から

フィールドで出会った言葉

杉万 俊夫（人間科学系）



私の専門分野はグループ・ダイナミクス（集団力学）です——主に社会学、社会心理学の理論をベースに、さまざまなフィールドに研究者が飛び込み、現場の当事者と

ともに現場の改善・改革に向けた協同的実践を行う学問分野です。私は、コミュニティや組織を主たるフィールドにしてきました。

フィールドでは、多くの人たちに出会ってきました。みな、個性豊かな人でした。行動をとともにする中、彼らから、忘れられないセリフを数多く聞くことができました。そのセリフは、研究を超えて、私自身の人生の糧にもなりました。

おい、元気か！

ある医師が京都市西陣の住民を往診するのに同行させてもらったことがあります。「おい、元気か！」——その医師は、道端の車いすで日向ぼっこをしている老人に呼びかけました。「あー、先生」と笑顔が返ってきました。なんと、医師はカバンから聴診器を取り出し、路上で診察を始めました。

戦後の極貧の中、医療保険もなく、病気になっても医者にかかれぬ西陣の住民が一致団結し、織物工場の一隅に自分たちの診療所をつくりました。上で紹介した医師は、住民と行動をとともにした人です。その診療所は、住民主体の路線を堅持

しつつ、総合病院へと規模を拡大していきました。1980年代、往診がほとんど行われなくなった時代でも、住民の意思を尊重して往診が継続されました。「西陣の道は、病院の廊下」なのです。

その医師も90歳を超えました。不治の病で、余命いくばくもありません。しかし、その志を継ぐ、私と同世代の医師がいます。彼は、200名を超える高齢者が互いに支えあうネットワークを運営しています。その総会には、老医師も車いすで参加し、皆と握手を交わします。いまや、参加者から老医師に「おい、元気か」の声がかけられているかのようです。私も落ち込みそうなとき、「おい、元気か」を自らに発します。

縁になる

過疎地と言われる農山村も、私のフィールドの一つです。鳥取県のある中山間地は、20数年来のおつきあいで、私にとって第二の故郷と言っても過言ではありません。ちなみに第一の故郷は博多です。

その中山間地は、保守性、閉鎖性、有力者支配という旧態依然の地域体質を色濃く持っていました。そこに、約30年前、「この地域体質を何とか打破しよう」と、二人の人物が必死の覚悟で立ち上がりました。Mさん（当時48歳）は、熱い情熱を内に秘めながらも、懐の広い人望の厚い人でした。対照的に、もう一人のTさん（当時36歳）は、企画力溢れる行動の人でした。その二人に約

30 人の仲間が集まりました。大多数の住民からは後ろ指をさされる中、まさに「決起」でした。30 人の小集団が、住民と行政を相手に孤軍奮闘し、ものづくり、人づくりの両面でだれも否定できない実績を上げた 10 年。その実績を追い風に、町行政（町役場）の中に運動が浸透し、集落単位の住民自治が実現した 10 年。そして、ここ 10 年は、まさに地域住民と行政のイコール・パートナーシップによる画期的な行政運営が目指されています。

30 年前、二人の人物が決起した時に、M さんは、「俺は、T さんの額縁になってやろう」と決意したそうです。T さんの行動力は、M さんの額縁の中で、いかに発揮されました。翻って、私は、学生の額縁になれたらどうかと反省させられます。

山の稜線に三又をかける

M さんは、こうも言いました——「町を取り囲む山々の稜線に、巨大な三又（さんまた）をかけよう」。三又とは、三本の棒の端を綱で結び、三角錐状に立てたものです。通常、二つの三又到長い棒を渡して、稲穂を乾かししたりします。

もし巨大な三又を周囲の山の稜線に立て、その上に立てば、中国山地の向こうにある岡山も見えますし、はるかかなたには関西も見えます。そんな視野に立って、自分たちの中山間地を変えていこうというわけです。言い換えれば、自分たちが住む狭い町だけを見て動くのではなく、遠くの外部から吹き込んでくる風を利用しつつ、外部に風を送り出しながら動いていこうというわけです。再び、翻って、私自身のことを反省させられます。果たして、自分の専門領域に三又をかけるような広い視野を持てたらどうか、と。

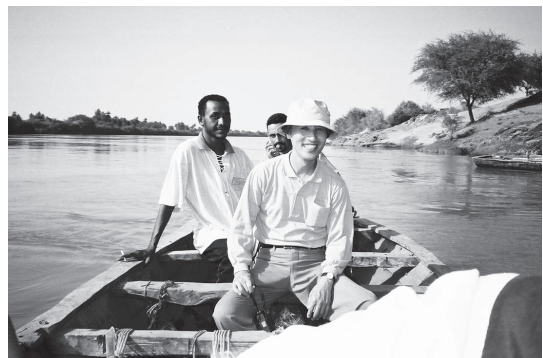
創造的昔がえり

外国でも、いくつかのフィールドに飛び込んできました。その一つは、インドネシア（ジャワ島）のある農村です。人口が急増しつつある同国では、農業の市場経済化による食糧増産が強力に推進されています。しかし、その陰で、農村コミュニティの絆は弱体化し、伝統的な文化は姿を消しつつあります。このままでは、日本の失敗の二の舞になる——私は、そう思いました。

すでに、一人の若い研究者が、その農村に入り込み、市場経済に流されない運動を呼び掛けていました。市場経済を否定するのではありません。しかし、市場経済以前の伝統や絆を取り戻しながら（昔がえりしながら）、市場経済にも「創造的」に適応していこうとする運動です。若い研究者の先の見えない実践を支援する人物が、二人いました。一人は、同じ学部の学部長（当時）、もう一人は、いわば在野の研究者でした。一時は、村民の分裂という危機もありましたが、現在、何とか新しい農村モデルができつつあります。

フィールドでは、人との出会いと同時に、人との別れも経験せざるを得ません。すでに紹介した M さんは、2 年前、この世を去りました。ジャワ島の農村運動で、若い研究者を支援した二人の人物も、相次いで亡くなりました。でも、彼らの情熱溢れるセリフは、今でも私の頭の中に響きます。

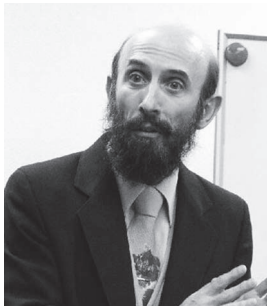
（すぎまん としお）



特集 ご退任を迎えられる先生方から

総人と人・環への想い

カール・ベッカー（人間科学系）



総人、人・環の創設時に、他学部の二番煎じではなく、人間社会と環境学を中心とする新たな理念と目標を掲げた。そのために、イェール大学やUCLA、オハイオなどから、有能な日本人を呼び戻しただけでなく、敢えて小生如き外国人を京大に呼び戻してくれた。それまでの外国人枠は、ラフカディオ・ハーンのような、外国語を教える外国人を特別教師枠で雇ったのみである。日本人の専任席に外国人を5年以上雇用することは、改正された法律では許されたものの、当時は先例が皆無に等しかった。小生は既に筑波大学の特別枠で哲学思想史学系に勤めながら、環境に拘わる科学技術庁会議に参加していたところへ、竹市明弘先輩が古巣に戻って来ないかと声をかけてくれた。「環境倫理には関心があっても、小生の専門は死にまつわる終末期医療」とお断りしたら、「終末期医療で見ている患者の多くは、何故がんや動脈硬化などになっているのか。空気や水、食べ物によるのではないか。自然環境を整えることと、高齢者の健康を守ることは、同じことだ」と言われた。さすがに先輩の論理に反論は無い。

教養部に入り、総人と人・環に変わり、何度も講座やカリキュラムが改編された。外国籍の問題のみならず、若い頃何度も飛び級した事が、給与にまで影響を与え、人事院での議論にまで及んだ。リニアモーターの電磁波が人体に悪影響を及ぼすと証言

したら、科学技術庁の委員会より外されたり、多くの日本人は脳死による臓器提供を拒むだろうと書いたら、一時的に医師会に敵視されたりした。スーパーなどに出回っている危険な食品添加物を取り上げる著書を書いても、日本語では出版してもらえず、結局、英語教材として出さざるを得なくなった。最近になって、文科省でも英語の出版物を評価してくれるようになったが、30年前にその見解を示してくれたら、苦労を重ねて書いた日本語の拙著より、英語の出版物は楽に三倍くらいできたであろう(苦笑)。愚痴をこぼしているつもりなどなく、京大での喜びと苦しみを省みているだけである。小生が勤めたイリノイ大学やハワイ大学は、州の優等生のために、大学内のミニ大学 Honors College を設けているが、自由度と倍率から考えても、総人は京大内の Honors College に等しく、ここで教えさせて頂けて良かったと感謝している。

毎年1月の学期末試験や全国センター試験、そして2月の学部入試などを監督する時の事である。何時間にもわたり、静かに通路を歩きながら、全身全霊で問題を解答している何百人もの若者を見渡す。これだけ多くの若い命が、一生懸命に勉強し、誠意をもって未来に向かって頑張っている力は、空気を通してひしひしと肌で感じられるほどである。有り難い。上手く実を結んでほしい。日本や世界のためにも、その頭脳、その生命力が活かされますようにと、祈るような気持ちになる。全国の若者が、力を合わせて国の為に頑張れば、日本が減じることはないだろうと胸には勇気が湧き上がる。

4月になると、新入生を相手に、彼らが担う近未来の社会と学問の意義を講義の中で紹介している。国民の税金によって、国立大学で勉強させてもらうからには、何らかの形で社会に恩返しをしたいものである、と。多くの学生は賛同して頷き、瞳が輝き、希望に満ちている。しかし少しずつそこから挫折が始まる。思うように友達ができない。思うように一人暮らしに慣れない。バイトと勉強の両立がうまくいかない。京大の大教室で教える研究者は、面白くて分かりやすいとは限らない。やがて自分は何の為に、何を勉強したいのかが分からなくなり、孤独、疲弊、自己嫌悪などを理由に自殺未遂をする者まで現れる。大学の責任ばかりではないが、問題は彼らの目的意識にあると痛感する。

進路指導をしていると、何がしたいか自分でも分からない、と嘆く京大生は少なくない。こちらから説教しても逆効果なので、聞くしかない。人生の中で、「これだけは許せない」「これだけはイヤ」「これだけは何とか改善してほしい」ということはないか、と彼らに聞くと、例外無しに「ある!」と答えてくれる。「親の不仲」「格差」「アルコール依存症」「事故」「差別」「中絶」「障害」「公害」「戦争」「災害」「犯罪」などと、学生の数ほど回答も多種多様である。無論、簡単に解決は出来ないが、自分の与えられた環境や能力に鑑みて、そのイヤな事を解決する一歩として、何ができるようになりたいのか、と聞き出してみる。科学で解決を目指す学生、社会政策で解決を目指す学生、臨床で解決を目指す学生など、その目標は勉強するモチベーションのバネとなってゆくのである。だが、本来ならば、それは大学に入る以前の問題ではないか。

大学で勉強するモチベーションを入試で問うことも考えられる。たとえ塾などで入試のテクニックを叩きこまれたとしても、採点者は根拠の薄い回答をすぐに見破ることができる。そして受験生も、未来社会を視野に入れる習慣を身に付けることであろう。欧米には、表向きの入学願書締切

り、かなり前もって願書を取り寄せて、完璧に仕上げた書類を早めに提出する申請者を優先的に入れる大学もある。教員となった小生がそれを聞いて驚くと、入試責任者に次のように教えられた。「早めに出す者は、モチベーションが高いので、たとえば能力は今一でも、締切ギリギリにケアレスミスを含む願書を出す者より、ぐんぐん伸びる。学生のモチベーションが高ければ、入学後も、我々教員が数学や語学、物理や心理学を次々と教え、その能力を伸ばすことができる。だが、大学に入るまでに、ケアレスミスを校正せず、早めに出す習慣を身に付けていなければ、入学後も身に付かないばかりか、モチベーションが曖昧であるゆえに、授業だって馬耳東風に終わってしまう」。そう聞いて、なるほどと腑に落ちた。日本の将来と、大学教育の将来を常に考えている者として、知識や暗記力の差異のみならず、モチベーションの差異も入試で考慮に入れたいものである。

蔭で「赤ペン先生」と言われるほど、学生の宿題に朱を入れて返す主義である。文法やスタイルと、内容や論理構造を、同時に修正する能力を持っていないため、全ての宿題を繰り返し読まねばならなくなる。また一度読んだだけでは、その読んだ順序やその時の印象によって偏見が入る可能性もある。繰り返し読むと、学生の理解や思考などを確認した上、個別に指導すべき問題点と、全ての学生に聞かせるべき共通の問題点とが分かる。学生に返却すると、彼らの成長ぶりも手に取る様に見られ、嬉しくなるのである。教え子たちが国内外で出版社や企業、NPOや家庭でも活躍していることを知ると、学生にかけた時間と心配は何事にも換えられないものだと思う。

心より尊敬できる多くの先輩や同僚、いつも支えてくれる事務員、将来の活躍を楽しみにしている卒業生と、京大でかかわらせて頂いたことは、愚生の生涯の宝となり、言葉では言い尽くせないほど感謝している。御縁がいつまでも続きますよう、祈る次第である。

(カール・ベッカー)

特集 ご退任を迎えられる先生方から

‘I can’t stop loving you’ と 「ランテルナシオナル」の間で

富田 恭彦（人間科学系）



私が生まれたのは、1952年2月。香川県の、沖積平野に山がすっと立っている、そんなのどかな田舎町でした。でも、小さい私は知らなかったのですが、ある会社の

債務の連帯保証人に父が知らないうちになっていて、父はその不正行為を知りながら、それを仕組んだ人が近い人であったためその債務のすべてを被り、私が小さい頃、私の家は大変厳しい状況になりました。そんなことがなかったら、当時7人家族だった私の家族は、その一人一人が、少し違った人生を歩んでいたかもしれません。

それでも結局私は大学に行かせてもらい、なれ親しんだふるさとを離れることになりました。

上の姉が、私が中学生のときに地元で就職、給料日の度に、私に小遣いをくれました（ここには書きませんが、下の姉にも、とてもよくしてもらいました）。最初に姉がくれた小遣いで私が買ったのが、レイ・チャールズの‘I can’t stop loving you’というレコードでした。なんでそれなのか、今になってみると記憶は定かではないのですが、アメリカンポップスにせよカンツォーネにせよシャンソンにせよ、すべてその音楽好きの姉の手ほどきで、きっと姉の影響に違いありません。そのレコードを買ったのは、琴平（ご存じでしょうけれども、金比羅さんの麓の町です）のレコード屋さ

んでした。その店には、確かムービングマグネット型カートリッジの付いた優れもののレコードプレーヤーがあって、その後も姉が毎月のように小遣いをくれる度に、その店へレコードを買いに行きました。いつも買う前に、そこの店員のお姉さんが、その優れもののプレーヤーで、曲を聴かせてくれたものです。

私は音楽が大好きで、しかも、小学2年生の時に、素面では無口な父が突然二極モーターのキットを買ってくれて、それがもとで、小学生から中学生にかけての7、8年、いわゆる「電気電子」に入り浸り、真空管の発振器を作って変調し、電波を飛ばしてみたり、各種フィルターの付いたアンプを製作したり、家庭は裕福ではありませんでしたが、その方面でのやりたいことはほとんどやらせてもらいました。それは、家族、親類、学校の先生方、近所の多くのみなさんのおかげと、今も感謝しています。

けれど、その反面、詳細は申しませんが、世の中あまりに不合理で理不尽だと、子ども心に思うことがいろいろとありました。高校に入って、それまではまっていた電気電子から方向転換、なにか、人（と自分）の助けになりたいと、基礎医学へ進むことを考えるようになりました（「こわがり」なので、医者になるのは無理かなと思っていました）。けれど、小学2年生のときに近所の子たちと手裏剣遊びをしていて目を怪我し、外傷性白内障のため両眼視ができなくなっていて、当時基礎医

学は顕微鏡を片方で見ながら、見えたものをもう一つの目で筆記していかなければならないと言われていて、それは無理でしたから、その方面に進むのは断念。結局、世の中の不合理に対する憤りはそのまま、ケースワーカーになろうと京大文学部の心理学に進むことにしました。けれど、結局、人並みに「人として生きること」の意味を自問しなければならなくなり、当時学生ボランティアをしていた京都障害児福祉協会の事務局長さんたちの勧めもあって、哲学に進むことになりました。

私は今も昔も相変わらず音楽が好きで、歌うことも、楽器を演奏することも大好きです。が、なにかあると、心の中に（今も続く）怒りを持ったまま大学に入った頃に（京大の封鎖解除の直後でもありましたから）毎日耳にした「ランテルナシオナール」（インターナショナル）が、中学のときに最初にレコードを買った‘I can’t stop loving you’とともに、無意識に頭の中で流れているのに気づきます。

私はマルクス主義者ではありませんし、組織は右でも左でも一人一人を手段としてしか扱わなくなる「傾向」を持つとずっとかたくなに信じていて、基本的に「徒党を組む」のを忌避しながら生きてきました。けれども、一人一人がなれ合うのではなく、共通の目的のために一緒にということであれば、ベ平連であれ、当時の教養部の先生が呼びかけた街頭デモであれ、意思表示はしなければと出かけたものでした。

人を大切にするというのは、私の知っている京大の、京大らしさです。でも、その京大も、その後どうなったのでしょうか。

私は、中学2年のときに『毎日新聞』に載った、当時としては珍しいカラー写真入りの、一面全部を使った京都大学の記事の、「官僚養成の東大に対して京都大学は……」の言葉に魅せられ、人の言うことも聞かず京大に来ました。結局、京大の

学生と教員として人生のほとんどを過ごすことになりましたが、中学2年（そして高校3年）のときの自分の判断が間違っていたと思いたくないばかりに、京大に対しては随分と屈折した思いを持つようになって、今日に至っています。京大ばかりではありません。相変わらず、私はたくさんの人々に支えてもらっているながら、社会や大学に対して、いつもどこかで斜に構えていて、死ぬまでこれは治らないだろうと、今は諦めています。

なんともまとまらない話ですが、人を愛し、またこの世はこれでいいのかと問うという意味では、私の無意識のお気に入りの二つの曲、‘I can’t stop loving you’と「ランテルナシオナール」は、屈折した、矛盾だらけの自分にとって、お似合いの二曲かもしれないあと、あらためて思う今日この頃です。そう言えば、ノーベル文学賞をボブ・ディランにというのも、私にはそれなりに嬉しい話題でした。

‘L’internationale’。覚えていてくださる方もおいでになるかもしれませんが、教養教育の危機の年の樟友会で、フランス語でこの1節を歌わせていただきましたのは、この歌とともに青春時代を過ごされた先生方、職員のみなさんへの送別の気持ちとともに、教養教育をその意識なく危機に陥れようとした人々に対する抗議の気持ちからでした。

これまで、至らない私を（放っておけないと）支え叱咤激励してくださったみなさまに、心より御礼申し上げます。どうかご健勝で。ありがとうございました。

（とみだ やすひこ）



特集 ご退任を迎えられる先生方から

旧教養部キャンパス建物異聞

東郷 雄二（認知情報学系）



去って行く者の責務のひとつは昔のことを語ることなので、学生時代を含めると40年近くを過ごした旧教養部キャンパス（現在の吉田南構内）のことを少し書くことにしよう。

私は建築を見て回ることが趣味なので、主に昔の建物について書いておきたい。

現在の吉田南構内には、大学設置基準の大綱化によって廃止されるまで教養部があったが、その前身はご存じのように旧制第三高等学校である。今ではその名残りは吉田南構内正門とその横にある門衛所しか残っていない。この二つは登録有形文化財に指定されている。私が1970年に入学した頃は新しい建物はまだ少なく、旧制三校の雰囲気が色濃く残っていた。正門を入って右側の現在1号館のある場所には木造の40番教室があった。左手の総合人間学部棟の場所には三校創立50周年記念に立てられた新徳館という建物があった。三校の卒業式などに使われていた講堂だが、私が入学した頃にはすでに老朽化して使用されていなかった。中への立ち入りは禁止されていたので入ったことはないが、今回ネットで京大映画ニュースの映像を見てみると、正面に雛壇があり、ぐるとバルコニーのように中二階を配したなかなか立派な建物だったようだ。老朽化のため1982年に解体された。近くに尚賢館という木造平

屋の建物があり、サークル活動や学生運動に使われていたが1989年に火災で焼失した。当時は正門を入って正面に築山があり、40番教室や新徳館や尚賢館が築山を取り囲むように配されていた。

正門を入って正面の現在の総合館はA号館といった。A号館北翼の東半分は1936年（昭和11年）に建てられた旧制三校の本館である。いちばん教養部らしい建物はこのA号館北翼ではなかったのだろうか。この建物には昭和初期に流行した建築様式の特徴がよく残っていた。強調された水平ラインと壁面のスクラッチタイルである。スクラッチタイルは1923年（大正12年）に旧帝国ホテル本館を設計したフランク・ロイド・ライトが考案したものだ。自分で愛知県の常滑まで行き、窯を指導して焼かせたと伝えられる。竹串で引っ掻いたような表面の傷が特徴的で、平板になりがちな壁面に陰影と表情を与えることからライトが愛用し、その後全国に広まった。壁面にスクラッチタイルが貼ってある建物を見たら、それは昭和初期の建物だと考えてまちがいない。百万遍から東に行ったところにある進々堂の建物（1930年 昭和5年竣工）にも同じようなスクラッチタイルが使われている。A号館北翼が2002年に解体されたとき、工事中の現場に行って記念にタイルのかけらを拾ってきた。「建築の忘れ形見」の一木努になったものである。今でもときどき夢に現れる校舎は旧A号館のすり減った階段と薄暗い廊下だ。

旧A号館の教室は板張で白いペンキが塗られて

いた。ある時、試験監督をしていたら、教室の後ろの壁に学生の落書きを見つけたことがある。「青空は我がアルコール仰向けに我が選ぶ日々わが捨てる夢」という寺山修司の短歌が大きな文字で書かれていた。なかなか粋な落書きだと感心した覚えがある。

旧 A 号館の中庭には木造平屋建の教室があった。これも旧制三校時代の名残である。私も教養部の学生時代にはこの建物で授業を受けた。当時のことはほとんど記憶にないが、たしか服部という名前の英語の先生の授業に出ていた。また現在、国際高等教育院の建物がある場所には図書館があった。木造平屋建でずいぶん古い建物だったから、これも旧制三校の名残かもしれない。

教養課程の2年間を終えると、本部構内に移って文学部で学ぶことになった。現在文学部新館のある場所には旧館があった。さすがに煉瓦造りではなかったと思うが、これまた古色蒼然としていて、ところどころに色付きのステンドグラスがある趣のある建物だった。旧館で授業を受けていると、いかにも学問に浸っているという気分になったものだ。現在その跡地に建っている文学部新館は味気ない建物である。

もうずいぶん前になるが集中講義で東大の本郷キャンパスにしばらく滞在したことがある。三四郎池のすぐ横にゲストハウスがあり、そこに一週間宿泊した。1日3コマの講義を終えると、夕方少し時間があるので本郷キャンパス内をくまなく探索した。木下直之他『東京大学本郷キャンパス案内』（東大出版会）という本で、本郷キャンパス内の建築が詳しく紹介されている。私が抱いた印象は、「京大に較べて東大の建物はずいぶん厳めしいな」というものである。これには訳がある。東大の建物を最初に設計したのは鹿鳴館を建てたジョサイア・コンドルで、得意とするゴシック様式を採用した。コンドルの建物は関東大震災で全壊し、

弟子の内田祥三が師のコンドルの様式に従って現在の建物を設計した。だからずいぶん厳めしいのだ。一方、京大の時計台本館を設計した建築学科初代教授の武田吾一が画家の浅井忠を伴い洋行したときは、ゴシック・リバイバルの時代はすでに終わっていて、アール・ヌーボーの時代を迎えていた。アール・ヌーボーに学んだ武田の建築は、ゴシックの厳格さとは対照的に軽やかでどこか女性的なのである。建物が与える印象は、権威の東大に対して自由の京大という校風をよく表している。

京大の建物では、楽友会館や北白川の人文科学研究所別館もよいが、私がいちばん好きなのは農学部の付属演習林旧本部事務室である。木造平屋建で四方に木製のバルコニーが配されていて、軒が深く張り出している。沖縄の伝統建築を思わせ熱帯地方の建物の趣がある。言っても詮ないことだが、日本では古い建物はどんどん壊される。ヨーロッパでは歴史的継承が重んじられるため、古い建物は壊さずに修理して利用するのがふつうだ。スクラップ・アンド・ビルドの日本では、大学もご多分に漏れず古い建物は消えてゆく運命にある。しかし時には「京大から消えたのは果たして建物だけか」と自問自答してみるのもよいかもしれない。最後に京大構内の建物に興味のある方には、京都大学広報委員会編『京都大学建築八十年の歩み』（1977年）という本をお奨めしておこう。

（とうごう ゆうじ）

特集 ご退任を迎えられる先生方から

新・魔女たちへのバラードに寄せて

前川 玲子 (国際文学系)



退任に合わせて、家や研究室を片付けていたら、色々なところに書きなぐった雑文やら手紙やらがでてきた。時には徒然なるままに、時には、退任あるいは転出なさる先

生へのお別れの言葉のつもりで書いたらしい。そうしたいわば雑文の屑のなかに、「新・魔女たちへのバラード」という一文があった。先輩の先生のご退官（当時はそう呼ばれていた）、そして同輩の先生のご転出が重なり、少し寂しい気持ちで書いたものではなかったかと思う。以下、読む人にはあまり意味をなさないであろう文を引用させていただく。気ままなことができるのが、退任する教員の特権であるから。

「新・魔女たちへのバラード」

嘗て吉田の山に三人の魔女がいた。ハーバードから「市民的自由」への熱き思いを語った A.M.、美を追求して短歌や詩を綴った K.M. エッセイストで学究肌の A.M. は吉田の地に天使のように舞い降り、やがてここを去り行く。天才肌の K.M. は、東へと下っていった。残されるのは、この世での正義と善を求めて効果のないアジェーションを、青い文体で続ける R.M. 耳をすませよ。麗しき才女たちの去った後、R.M. の悲しき呟きが聞こえてくる。泣き、怒り、激しく罵り

あい、そして励ましあったあの魔女たちは、どこに行ってしまったのか。今日、吉田の山は霧の中にある。嘗て吉田の山に三人の魔女がいた。

これを書いたのは、もう 10 年以上前のことだったと思う。私が京大に赴任したのは 1991 年、当時はまだ教養部だった時代で、その翌年に総合人間学部が立ち上がったのだと記憶している。赴任したころは、女性の教員は比較的少なく、そのせいか、物理学とか科学史とか私とは分野のちがう先生とも会うことが多かった。新校舎が建つ前で、女子トイレも極めて少なく、しかも、校舎もトイレもすべてがやたらに汚かったが、異分野交流の場は意外なところにあるものである。とにかく、私立出身でぽおとした人間である私にとって、京大で出会った同僚や学生はみんな個性的で新鮮であった。なかでも、才能ある女性教員が、組織の論理や男性の論理とはまったく違った独特の感性で、周りを攪乱させている様子は、17 世紀のセイラムの魔女のようで、私には新鮮に感じられた。退官時に、A.M. 女史から受けついだ院生が、宮崎駿のアニメにおける少女の表象を研究していたため、作品を見ていなかった私は、ビデオを借りてきてにわか勉強をしたが、そのうちの一つが「魔女の宅急便」だった。そんなことも、魔女バラードを殴り書きした理由だったかもしれない。

今のように会議が多くなかった時代には、少し

休み時間があると、吉田山によく登った。のちに茂庵などというしゃれた喫茶店もできて、卒業生などがくると、よく柚子茶とピタパンなどを食べに行った。誰かと一緒に吉田山に行くのも楽しいが、少し落ち込んだときなど、一人で吉田山のあたりを歩いていると、京大に通った学生やそこで教鞭をとった者たちの囁きが聞こえてくるような気がする。大学に通って幸せに卒業していった者もいれば、志半ばにして挫折した者、命を絶った者もいる。学問的に華々しい業績を残した者もいれば、可もなく不可もなしといった私のような凡人もいる。私が教えた院生で、ハンガリーから留学していた院生がいて、今から8年ほど前に、2月の寒い京都の下宿先で亡くなっていた。それは、私にとって今でも忘れられない悲しい思い出である。彼の名は、バリント・ベレス君といったが、私がここを去ったら、もう彼のことを覚えている人もいなくなるかもしれないので、彼ともまた吉田山を歩いて色々なことを話し合ったことを記しておきたい。

私はアメリカ知識人の研究を主にしてきたが、1950年代の赤狩りの時代は、魔女狩りの時代ともいわれ、異端の思想を持つ者、外国人、兵役拒否者、あるいは性的なマイノリティも含めて排斥の対象となった。日本でも、戦前、戦中には国民総動員体制に異議を申し立てた人間は、魔女狩りの対象となった。とりあえず平和な現在でも、「空気がよめない」という理由で無視されたり、仲間はずれになったりして自殺する中高校生が後を絶たない。ときには集団暴行まで横行している。私は多文化社会論という科目を総合人間学部で担当してきたが、単一の価値観しか持てず少しでも異端となる言動を取るものを切り捨てる社会、上位下達で一度決まった方針は、ただ既定のものだという理由で限りなく存続していくような社会を見直すきっかけにしてほしいというのが、私の願いだっ

た。もっとも、小規模なクラスであったし、アメリカ研究入門という要素も強かったので、こうした私の意図は伝わりにくかったかとも思う。それにしても、既成の学部の枠を超える文理一体型の学部として発足した総合人間学部では、特に、どのような形でも魔女狩りが起こらないようなまさに「自由の学風」に頑固にこだわっていてもらいたい。逆に、魔女狩りの対象となるような事態が万が一起これば、吉田の山に集結して戦ってもらいたい。

退任したら吉田の山に登ることもあまりなくなるだろうし、もしかしたら、京大の一員であるときだけ、特別に、色々な魔女（そして魔男）の囁き声は聞こえるのかもしれない。バラードのなかの三人の魔女のなかで、最後に消えてゆくのが私である。才能ある魔女たちが先に去った中で、あまり特性のない私が吉田の山に長居をしてしまった。私があこがれて教員になったこの伝統ある京都大学が、そしてその中でもっとも新しく私自身と歩みをともにしてきた兄弟のような総合人間学部が、吉田山の懷に抱かれて今後もまっとうに学問・教育の本道を進んでくれることを願わずにはいられない。

吉田の山は、今日は晴れて澄み渡っている。明日の朝霧のころ、そろそろ姿を消すことにしようか。

（まえかわ れいこ）



招聘教授とのアメリカ研究セミナーにて（2014年9月）

特集 ご退任を迎えられる先生方から

激動のワンダーランドで過ごした 34 年 6 ヶ月

稲垣 直樹 (文化環境学系)



『馬齢を重ねる』という言い方があるが、人間、無駄に年齢を重ねてばかりいるわけでもない。世の中、意外性と偶然に満ちているところか、もっぱら意外性と偶然で成り

たっていることが分かってくる。若さを失う代わりに得られる数少ない達見であろう。」

9ヶ月前に刊行した拙著の「あとがき」をこのように書き始めました。この思いはさらに強くなってきましたが、意外な偶然のなかでも最大級のもの、今でも信じられない偶然は、35年前にわが身に起こりました。

博士論文の審査を終えてフランス留学から帰国し、東京大学大学院博士課程在学中の身ながら、4月の新学期から東京とその近郊の大学で非常勤講師を勤めるのを前に、結構夜遅くまで出歩いていた頃でした。夜の10時半頃だったと思いますが、大学の恩師の一人から、まったく突然電話が掛かってきました。この日ばかりは、早めに帰宅していて本当によかったと思います。

「京都大学で公募、やってるよ」というものでした。

京都大学は高嶺の花と言いますか、雲の上と言いますか、私などはまったくお呼びでないと思っておりまして、助教授の公募でしたので、この電話は意外中の意外でした。それまで「就活」は

したことはありませんでしたし、宝くじも買ったことはありませんでした。しかし、京都大学は中・高等学校時代からの憧れでしたので、それこそ、宝くじを初めて買うつもりで、応募はしてみました。

それからほぼ4ヶ月後、応募したことが記憶の彼方に遠のいていた頃、またしても夜の10時半頃でしたが、電話がありました。教授会で「エンドレステープ」の異名を持つ熱血先生であることが後に分かった、ある先生の甲高い声が受話器の耳もとから迸ってきました。

「あなたに決まりました！」

お話を伺ってみると、どうも公募で私が選ばれたらしいこと、教授会のための書類の準備をしてほしいこと、という内容でした。審査に当たられた先生方のどなたとも面識がなく、あとで逆の立場になって分かったことですが、公募の審査に当たった教員全員がすべての公募書類と送付業績を読む、極度に本格的な公募審査でありました。なぜ選んでいただけたのか未だに分からず、宝くじに当たった気持ちで今でもおります。京都の西の方に住んでおり、北西に足を向けて就寝しておりますので、京都大学および審査に当たられた先生方に足を向けて寝たことは一度もありません。

そんなわけで、1982年10月1日に京都大学に赴任しました。赴任してみると、そこは「異界」というよりも、むしろ「天国」のようなところでした。当時、大学関係者の方々は「日本のガラパゴ

ス島」とおっしゃって、どことなく誇りにしておられました。

登録有形文化財に指定されている旧第三高等学校時代の正門に入って、まず驚かされたのは、当時ニュース映像で馴染みのあった、北京大学キャンパスそのものといった光景でした。数百台に及ぶ（あるいは千台にも見えてましたが）自転車の波が幾重にも重なりつつ、無秩序に見えながら実はそれなりの秩序のあるうねりを見せていました。東京は電車・地下鉄通学が普通でした。向かって左側（現在の総合人間学部棟）には、寺の本堂ないし講堂のような壮麗な葺の木造建築（後に焼失）が鎮座ましまし、正面（現在の吉田南総合館北棟）には、たぶん以前写真で見たことのある、旧第三高等学校本館が、不釣り合いに粗末な車寄せの突き出た、直方体の威容を誇示していました。

度肝を抜かれる間もなく、個人研究室に案内されました。それが、畏れ多くも、この旧第三高等学校本館の3階でした。学生運動華やかかなりし1970年から10年経っていましたが、その名残が未だ健在で、入り口のドアには表と裏からベニヤ板が打ち付けられ、それに黒いペンキで「解放区」と書かれていました。黒いダイヤル式の電話器の背には、白いペンキでくっきり「革命的電話」と書いてありました。

以後10年ばかり、私は「解放区」に留まり、「革命的電話」で同僚諸氏、事務の方々、学会関係者と密議を凝らすこともなく、革命からは遠い日々を送っておりました。

ところが、変革は外からやってきました。大学改革の波が押し寄せてきたのです。今から25年前、1992年に教養部が廃止され、総合人間学部が設立されました。14年前、2003年には、世間で言うところの「大学院重点化」が起こり、基本的に全教員が大学院人間・環境学研究科所属となりました。「大学院重点化」、そして翌年の国立大学法人

化とほぼ軌を一にして、懐かしの旧第三高等学校本館は取り壊され、跡地に現在の吉田南総合館北棟が、やや厚みの少ない凱旋門といった姿を見せました。あの異様な威風堂々たる旧第三高等学校本館は、思えば、紛れもない「象牙の塔」でありました。それがなくなったことはそのまま大学と学問の世界が「聖域」でなくなったことを意味します。以後、過酷な（世間並み、と言われる）競争原理に晒され、大学と学問の世界は今日に至っております。

改組で幸せだったのは、学部と大学院で個別に（おこがましくも）指導する学生・院生諸君を抱えさせていただいたことでした。家族以外の人間存在のことで一喜一憂している自分（人間のそのような感情）は新しい発見でした。サン＝テグジュペリが1938年に「パリ＝ソワール」紙に寄せた論説のタイトルの言葉 *un sens à la vie*（人生に意味を）を思い起こしました。そうした日々は私にとって、かけがえのないもので、言葉の本質的な意味において、私の「人生に意味を」与えてくれました。ただただ感謝です。

かつて京都大学には名物教師と言われた方が多数おられましたが、そのお一人、森毅先生は数学者であるとともに、すぐれた随筆家でもありました。森先生の名著の一冊に『ボクの京大物語』（福武書店、1992）があります。「物語」つまり虚構の衣を纏いながら、内容は当時の京都大学、特に教養部の内幕を活写していました。激動のワンダーランドで過ごした34年6ヶ月を（守秘義務を守りながら）同様の本に仕立てるのが目下、私の見果てぬ夢となりつつあります。

（いながき なおき）

特集 ご退任を迎えられる先生方から

「社寺」見学会 23 年

西山 良平 (国際文明学系)



京都大学には様々な行事(仕事)があるが、その一つに教職員レクリエーション行事「社寺」見学会がある(教員も参加可能、何人かの教員が参加されたことがある)。こ

の「社寺」見学会は「【本件担当】総務部人事課共済掛」とあるが(今年度)、その講師を23年つとめさせていただいた。平成3年度に教養部に着任し、その3年後から23年であるから、京大生活のほぼ全期間といえる。日本の中世社会では「寺社勢力」というので(黒田俊雄『寺社勢力』岩波新書、1980年)、自然と「寺社」見学会といってしまう。この講師は「本学規程により謝金支給」とあり、謝金がそれなりに支給される。とはいえ、「栞」に原稿を書かねばならず、見学会当日はだいたい午前8時過ぎに集合ということもあって、かならずしも楽な仕事ではない。しかし反面、著名な「社寺」を3箇所程度回ることができ、ご当地の昼食付きなので、メリットがないわけではない。23年だから、見学先はのべ70箇所のにぼる。「社寺」見学会で初めて行ったところもあるし、浄瑠璃寺には4回も行った。生来出不精なので、ありがたいことである。また、昼食は、10年以上前の掛長さんのご尽力以来、ご当地の工夫が凝らされるようになった。

「社寺」見学会は実施状況の記録によると、昭和

29年度から始まり、初期は1年2回であるが、昭和58年度以降は1年に1回となり、今年度で88回目になる。当初から原則的に歴史・建築・美術・造園の4人の先生方が講師を担当され、錚々たる先生方のお名前が並ぶ。歴史から造園まで学内で確保できるところは京都大学ならではの。私は前任の上横手雅敬先生から引き継いだのであるが、他分野の先生方のレクチャーから大いに学ぶところがあった。建築・美術・造園のご専門の立場からのご説明から、それなりにご専攻の学問スタイルを垣間見れたからである。あくまで垣間見であるが、かなり勉強になった。

こう書くと役得が多いように見えるが、やはり仕事である。例年3月中に次年度の打合せの日程調整の問い合わせが来る。5月中に打合せをするのだが、4人の講師の間で、秋のほどほどの土曜に日にちを設定する。最近、もっとも多忙な先生の空きの日から探すのが手っ取り早い。次は見学先であるが、何となく決まることもあるが、すでに退職されたさる先輩の先生は、その年が何かの記念の年にあたっていないかなどに気を配られていた。場所が決まると「テーマ」をどうするかに移るが、ここ20年は「～をたずねて」路線が定着し、今年度は「初秋の南山城をたずねて」であった。見学先は参加人数に影響するようで、参加が多いか少ないかはだいたい予想がつく。その上で、4人の講師で原稿を分担して「栞」を作成する。原稿の分担をめぐっては若干の駆け引きら

しきものがあるらしく見える。原稿は事務方でまとめられるが、今年度は全30頁の堂々たるものである。10年程度前から表紙はカラー、しっかりと製本されるようになった。

「社寺」見学会とはいうものの、専門の先生方の説明付きであるから、見学+講演会といってもよく、学問的である上に、お徳感が強い。そもそも見学先が普通の観光ツアーと比べると、宮町遺跡（紫香楽宮跡）・一乗谷朝倉氏遺跡・近江大津宮錦織遺跡・伝飛鳥板蓋宮跡・安土城跡・御城番屋敷（旧松坂御城番屋敷）など、かなり専門的である。それでも参加された方々はたいへん熱心である。さすがに京都大学の「社寺」見学会というべきである。10年程度前に参加者が減少気味になり、講師がいっそう多忙になったなどのこともあったが、近年は常連の方のほか、「初めて」参加された方が半数近くおられ、過去にも増して定着したといえるだろう。

「社寺」見学会の当日は晴れる日が多い。平成22年度は台風接近のため中止になったが（この年も1回にカウントされている）、そのほかは一乗谷朝倉氏遺跡（平成7年度）平城宮跡（平成10年度）で雨に降られた記憶があるくらいである。天気運がよいのか、好天に恵まれることが多い。

当日の説明には、最新の成果を組み込むように努力している。「栞」の原稿作成には骨が折れる。例えば、今年の見学先は一休寺・岩船寺・浄瑠璃寺などであるが、このうち文献資料が豊富な一休寺と浄瑠璃寺を担当した。それぞれに由緒があり、参考文献を調べ、原稿をまとめあげるのに実働で1週間程度は優にかかる。専門に近いのは浄瑠璃寺で、調べていくと中川成身院との関係など、それなりに面白いのであるが、たまに無案内のところにあたることもある。事前に調査に行くこともあるのだが、さる先輩の先生が「下見に行った」と言われたことがあり、どなたにも楽な仕事ではな

いのだと悟った。一番苦労したのは大津宮跡であるが、この時は報告書を調べ上げ、現地を下見に回った。その分、勉強になったとも言えるが、時間に余裕があるわけではない。原稿に熱中するあまり、内容が専門的になりすぎ、その結果授業に転用したことがある。

詰まるところ、京大の「社寺」見学会は科学的でお得であり、したがってお薦めである。今年度は事務局のご好意で、最後に挨拶をさせていただいた。また、参加者に10名弱の旧知の方がおられた。お礼を申し上げるとともに、「社寺」見学会が永らえることを念じる次第である。

（にしやま りょうへい）



源氏物語千年紀事業・文化財講演会
『源氏物語の風景―寝殿造―』にて
(京都アスニー 2008年10月4日)



授業のオプションで院政期の白河を現地見学
(左京区岡崎にて 2014年12月25日)

特集 ご退任を迎えられる先生方から

中央館のこと

阿辻 哲次 (国際文明学系)



一部の大学をのぞいて、日本の大学は過半数が理系の学生である。それは本学でも同様で、むかしもいまも、どこの大学においても、実情はほとんど変わっていない。

私が入学したころはすべての学生が最初の2年間は教養部に属し、最低2種類の外国語を履修することになっていた。当時の外国語開講科目は英・独・仏・中・露の5種類で、うち中国語は理系学部には開放されていなかった。

そんななかで理系の学生は、ほぼ全員が英語とドイツ語を選択し、それに対して法学部や経済学部など文系学部の学生の中にはフランス語を選択する者もある程度はいた。しかし文系でも圧倒的多数はやはりドイツ語を選んだものだった。

文系の中でも文学部は、専攻する対象によって外国語の選択がとくに重要になる。フランス文学を専攻しようと思う者は当然フランス語を選ぶし、中国文学専攻志望の私は、もちろんまよわず中国語を選んだ。

しかし不思議なことに、私たちの時代では国文学や国史学を専攻しようとする者の多くが中国語ではなく、ドイツ語かフランス語を選んでいった。国文学や国史学の領域では、とくに古い時代を研究するためには日本や中国の古典文献を扱う必要が

ある。だから彼らは漢文の学習に非常に熱心だったが、しかし現代中国語の学習はおそらく必要と感じなかったのだろう。

国文や国史を専攻する者がドイツ語を学ぶという選択自体に、どんな分野でも、学問をするためにはまずドイツ語を学ばなければならないという当時の考え方がぬきがたく存在していたことがわかる。そしてそれに抵抗し、自分の興味からフランス語を選ぶ者はいささか「変わり者」であって、それ以外に開講されていた中国語やロシア語を選ぶ者は、なにか特殊な目的をもって勉強する「変人」といっても過言ではなかった。

1回生の時に私が受講した中国語の講義には、だいたい30人くらいの学生が出席していた。そのころの授業では出席をとることなどまずなかったから、教室に出てこない学生も何人かいたにちがいない。しかしほぼ全員が教室に出てくるはずの試験の時だって、50人いたかいなかったかという記憶がある。断っておくが文学部だけのクラスではない。2500名をこえる全学部の新入生のうち、中国語を選択した者がわずか50人前後なのである。

その50人ほどが、A号館（現在の吉田南総合館）の中庭にあった、旧制第三高等学校時代から使われていた木造教室で、本当に「ほそぼそ」という感じで、かたまって講義を受けていた。旧制三高の名残の校舎といえは伝統的な風格を感じ

られ、さぞ立派な教室だろうと思われるかもしれないが、実際にはまだ講義に使われるのが不思議なほどに老朽化した建物で、梅雨時には天井から雨漏りがすることもあったが、それでも「中央館」という立派な名前がついていた。

受講生が少ないから、講義を担当する先生の数も当然多くない。中国語の専任は尾崎雄二郎先生ただひとりで、ほかに非常勤講師として、一海知義先生が神戸大学から来ておられた。

この拙文を目にされるほとんどの方はご存じないだろうが、尾崎先生は中国語学、特に音韻学の世界的な権威で、のちに人文科学研究所に移られ、所長として退官された。一海先生は陶淵明や陸游の詩などに関する多くの著述で知られる、著名な文学研究者であった。

そんな碩学から中国語の手ほどきをうけた70年代前半は「文化大革命」の真っ最中であり、そのころ中国語を勉強しようという意志をもっていたのは、毛沢東の革命思想に心酔する「革命派」か、あるいは私たち数人の仲間のように中国の文学や歴史、哲学などを専攻しようとする東洋学志望の者くらいしかいなかった。両者は水と油のようにまじりあわないタイプではあったが、しかし大学における「マイナーな言語」の学習という場を通じて、それなりに交友関係もできた。私は講義で知り合った法学部の学生と大学付近の居酒屋で飲み、彼から毛沢東の革命思想を詳しく解説されたことがあった。毛沢東についてそれまで何も知らなかっただけに、彼の話には大きな感銘を受けたものだった。

大学だけではなく、社会全体を見ても中国語の学習人口などごくわずかだった。そんな時代だから中国語を学ぶための教科書もほんの数種類しかなく、それも中国で編纂された教科書をそのまま日本語に焼きなおしたものばかりで、中国の革命

を日本に持ちこもうとする意図がこめられていると批判されても仕方がないものだった。

そんな中でわれらが両先生は、きわめて幅広い視野に立って中国語の背景にある歴史や文化を語り、目先の現実にはかかわらない「雑談」を熱く展開された。

後年の私は両先生と同じ立場で教壇に立ったが、あの両先生のような講義ができたとはとうてい思えない。だがチィチィパッパの合間に、「日本はあれだけ多くの文明を中国から受容したのに、中国ではきわめて普遍的であった科挙・宦官・纏足がついに日本に來なかったのはなぜか？」という問題についての私見を語り、それまであくびをしていた学生の目が生き生きと輝き出してくるのを見ると、してやったりと快哉を叫び、すでに他界された両先生に「わしものがんばりましたデ」と報告したくなったものだった。

(あつじ てつじ)



教養部中央館（第三高等学校画学教室）
京都大学大学文書館所蔵（上下とも）

連載企画 「総合人間学とわたし」

総合人間学愚見

安部 浩 (人間科学系)



総合人間学を学ぼうとされている学部生の皆さん。皆さんは今何故ここに居られるのか。

「人間固有の研究対象は人間なり」(ポーブ『人間論』)。人間学(乃至は

人類学)の名に値する知的営為が、有史来連綿と存続してきた所以を簡明に示さんとすれば、如上の詩句を引くに如くはない。だが卑見によれば、人間学は今日、現代ならでは有しえぬ存在理由をも負っている。

我々が生きている社会をその今日の有り様において形作っているものは、蓋し「啓蒙」の精神である。「啓蒙とは自分自身にその咎がある未成年の状態から脱出することである。未成年の状態とは、他者の悟性の指導無しには自らの悟性を用いることが出来ないことである。この未成年状態が自分自身にその咎があるのは、その原因が悟性の欠如にあるのではなく、他者の悟性の指導がなくとも自らの悟性を用いる決心と勇気の欠如にある場合である。賢くある勇気を持て。故に『汝自身の悟性を用いる勇気を持て』ということが啓蒙の標語である」(カント『啓蒙とは何か』)。この精神に背中を後押しされて、我々人間は今や、所与の「人間の条件」を出来る限り意の儘に改変せんとする意志に満ちている(伝統的道徳や宗教の無力化、世俗化の動向等)。その帰結が我々の現代社会に他ならぬ。そして今日の科学技術の進展も又、如上の意志の原因ではなくして、寧ろその結果である。

科学技術・人間の条件を改変する意志・現代社会の三者の連関は、これを大まかには次の如く捉えうるであろう——科学技術の進展により、従来はなしえなかったことが新たに可能となる。この「実現可能なこと」(例えば核分裂反応)は——科学者や産業界の研究・技術開発への意志と社会的要請との共犯関係(産官学協同による「マンハッタン計画」)によって——直ちに「実現したいこと」(原子爆弾の製造)へと転じ、やがてそれは程なく実用化されてしまい、現代史の一齣となる(原爆投下)。そしてその際、こうした「できる」(科学技術)と「する」(現代社会)を共に準備し、これらを秘かに導いているものこそが、両者を繋ぐ要である「したい」(人間の条件を改変する意志)なのである。

その結果、地球上の自然界には未曾有の状態が生ずることとなり(核爆発、化学合成、遺伝子組み替え操作等)、そして我々人間にとっても又、これまでは不可能であった自己改造の可能性が遂に実現されるに至った(臓器移植、脳への薬物的・外科的介入、性転換、整形、国籍・居住地変更、養子縁組の悪用による姓の変更や改名等)。かくて古来より人間が問い続けてきた或る一つの問いが、今やより一層切迫せる難問となって我々に突き付けられる——「人間とは何か。自然界において我々の占める位置、我々のあるべき有り様とはいかなるものであるのか」。惟うに人間学は今日、多かれ少なかれ、この問いに答えることを以てして己が存在理由となさざるをえぬのである。

しかしながら、かかる問いに取り組む際、我々は

そもそも如何なる立場に立脚しているのであろうか。それは無論、自然界及び我々人間が現に存在していることを暗々裏に自明の事柄として前提している立場ではないか。だが先述の如く、今や自然界においては従来ならば到底考えられなかった新奇なる事態が生じ、地球環境問題の弥増す脅威に我々が曝されている現在、自然界と人間の存在は最早必ずしもこれまでの如く当然の所与ではありえなくなっているのではないか。かくて「人間とは何か」なる問を解明せんとする人間学に今日従事する為には、我々は先ず「そもそも当の問の解明それ自体をして可能ならしめる前提はいかにして保証されうるのか」、すなわち「自然界及び人間の存在の確保は如何にして可能か」という問（これを「総合人間学の問一」と名付けよう）に取り組まねばならぬことになる。

だがこの問が「人間学」ではなく「総合人間学」に属すると目されるのは、如何なる理路に基づくのか。この点を詳らかにすべく、ここで冒頭の問いを繰り返そう。皆さんは今何故ここに居られるのか。

凡そ生物は自らにとって有用な物質やエネルギーをその環境から選択的に取り出し、自己維持や自己複製の為にこれらを合成または変換する一方で（同化作用）、この生命活動の結果生じた不要な物質や熱量を再び環境に廃棄している（異化作用）。そしてこうした生物の二作用は、その生物が属する生態系における物質循環とエネルギー動態に依拠しており、更にこの生態系の循環はそれ自体、より一層大きな系における物質循環に組み込まれている。それ故、生きとし生けるものは畢竟ずるに、地球規模の物質循環を以てして自らの存在の最終的な基盤となしているものであり、この自然界の循環の中に予め投げ込まれていることによって初めて存続しうるのである。我々人間も又その例外ではない。皆さんが今ここに居られるのは、生を享くるや否や、自然界の循環の直中に身を置かざるをえぬ我々人間の存在の事実性の故に他ならぬ。

ここで我々は、「総合人間学の問一」においては人間存在が——その特異性に関して、他の生物や自然界から切り離されて単独で問われているのではなくして——寧ろあくまでも他の生物と分かち合っている共通の存続基盤に関して、自然界の構造や他の生物の諸活動との様々なる輻輳した関係において問題にされていることに気づく。つまりこの問は、人間は啻に人間の究明のみを以てしては明らかにされず、却ってこの人間の究明を<人間ならざるもの（環境）に関する解明>と統合する方途（人間・環境学）を通じて初めて十全に理解されうることを——従って総合人間学なるものの必要性を——示唆するものなのである。

だが「人間の存在はいかにして確保されうるか」という「総合人間学の問一」はそれ自体、当の問が成立している地盤に関わる別の問をも更に呼び起こす。すなわちそれは「そもそも人間の存在は確保されるべきなのか、仮にそうであるとすれば、それは何故か」（「総合人間学の問二」）という問である。私見では、この「問二」に答えることこそが先決である——先ずもってこれに対し、何らかの肯定的解答を説得的な仕方与えることなくしては、我々は「問一」を問題にすることすら許されまい。

アフリカの類人猿と袂を分かち、人類の祖先が地球上に出現したのは、今から凡そ七百万年前の（或いは一千万年前に遡る）出来事であるとされる。爾来その時々数知れぬ苦境に直面しつつも、人類は辛うじて連綿と生き延びてきた。皆さんが今ここにこうして居られる所以である。だが自らが招き寄せた地球環境問題の為に、諸々の時代の終焉（Zeitenende）に何時でも転じうる虞のある現今の最新かつ最終の時代（Endzeit）において、我々人類は今後も尚生存することが果たして許されているのであろうか。

何故人類は存続すべきなのか。皆さんは今何故ここに居られるのか。

（あべ ひろし）

連載企画 「総合人間学とわたし」

枠のない場

塩塚 秀一郎 (文化環境学系)



私が総合人間学部に勤め始めて四年が過ぎた。学際や文理融合を謳う新設学部で研究教育を行っ

ていながら、そうした理念がいったい何を意味しどう機能しているのか、立ち止まって考えたことはなかったかもしれない。今回、自分の考える「総合人間学」について書く機会を与えられたので、自らの来し方を振り返るかたちで私見を述べてみたいと思う。

私の専門分野はフランス文学である。この分野の中では周辺的な領域を研究しているという自覚はあるし、ときには、現代アート、都市論、環境学などにちょっかいを出すこともあるが、フランス文学という学問分野の境界をわずらわしく思ったり、それを打ち破る必要を感じたりしたことはない。もともと、仏文にはそんな融通無碍なところがあって、外国語能力とテキスト読解の技術を徹底的に習得したあとは、各自が自由に研究対象や領域を開拓して構わない、そうした共通理解がある。したがって、初めて大学に勤めた十数年前から総合人間学部着任後に至るまで、研究を進める上でことさらに〈学際〉という理念を意識したことはない（もっとも、昨今の〈人文学の危機〉的状况において、生き残りのための外圧から自省を強いられることはあるが）。

一方、教育においては、自らが理想と考える方

法と総合人間学部独特のシステムがうまくかみあわず、試行錯誤を重ねているのが現状である。今でこそ仏文などという古くさい学問分野に収まっている私であるが、もちろん、この領域を選び取りそのディシプリンに基づく教育を受けた時期があり、その時分には当該分野の風習に疑問も不満もあったように思う。私が所属していたのは東京大学教養学部のフランス科という学科だった。文学部の仏文科とは異なり、フランスに関わる事象であれば、狭い意味の文学に囚われることなく、映画、美術、思想、社会問題など、何を研究対象にしてもよいという自由な場所である。このような〈なんでもあり〉の枠組みにおいて、最低限のディシプリンとして機能していたのは、読む・書く・話す・聞くの四技能にわたる、フランス語の徹底的な習得だった。私としては文学には勝手な思い入れを持ってはいたものの、フランス語にはそれに匹敵する動機づけが存在しなかったため、正直なところ、フランス語漬けとも言うべき環境には辟易し逃げ出したい気持ちにもなったものである。フランス文学も確かに面白いけれど、世界には、英米文学も中国文学もあるのに、どうしてこれほどにフランス語なのか。

結局、フランス語から逃げられなかったのは、フランス科という枠があったからだった。それに、中南米科に脱走しようがロシア科に鞍替えしようが、そこでもスペイン語やロシア語漬けにされることは分かっていた。あるいは、文学部には西洋

近代文学科なるものがあることも知っていたが、その卒業生は大学院では各国文学科に散っていくと聞かされていた。「西洋近代文学」の専門家は養成しかねるということなのだろう。

学生時代には輒であったかもしれない学科という枠組みが、教員になるとありがたい仕組みにも感じられるのだから、ご都合主義もいいところである。だが、総合人間学部にもフランス科に相当する枠組みがあればいいのに、とは考えられないのが私の悩みどころなのだ。東京大学教養学部フランス科におけるフランス語漬けは、確かに研究者としての私の財産になっている。でも、研究者の道を目指さなかった同級生たちにはどうだったのか。必死で辞書を引きながらわずかな分量のテキストを読むより、日本語訳で大らかに多量の書物を読む方が、卒業後にも活きる〈人文知〉の獲得に寄与したのではないか、と思わないでもない。

こんなことを考えるようになると、〈外国語〉ではなく〈文学〉のほうが問題の前面にせり出してくる。学生時代から薄々気づいていながら、外国語の問題で手一杯になり、直視するのを避けていたような気もするのだが、そもそも近代文学を研究し、教育するとはいったいどういう意味をもつ営みなのか、という疑問である。日本のものであれ、外国のものであれ、古典文学は言語面においても思考様式面においても現代との隔たりが大きいので、内容を理解し味わうためには専門家の導きが不可欠である。場合によっては厳しい言語的修練もやむを得ないであろう。だが、近代文学をアクチュアルに価値あるものとするのは、良い意味での素人っぽい問題意識なのであり、演習室における訓詁的注釈や偏執的精読は、世界の諸問題を具体的状況において考えるという、文学のもつ大きな可能性を殺してしまうのかもしれない。これは文学の研究教育に関わる誰もが感じるはずのジレンマではなかろうか。

総合人間学部という、仏文どころか文学一般にすら特化した枠組みが存在しない場においては、いっそのこと、翻訳文献を題材としつつ、文学をめぐる大らかな議論を学生と交わしたいという気持ちが私にもある（そういう試みも行なってみた）。だが、一方で、総合人間学部が大学院人間・環境学研究科との接統を放棄してよいのか、とも自問せずにはいられない。それに、専門家にならない学部生にとっても、外国語での精読は有意義であるはずなのだ。もちろん、なぜあるテキストを原語で精読するのかという、文学部文学科であればあえて説明する必要のない前提を、シラバスなり初回授業なりで、説得的に伝えられなければ、受講者はほとんど望めないだろう。けれども、これは矛盾した振る舞いでもある。テキストを精読する意義は、読み手のおおよその理解や期待が細部において裏切られる点にこそあるはずで、予定調和的なプログラムには意味がないからだ。得られるものが事後的にしか分からない文献読解という教育方法は、あらかじめ達成目標の明示を求める昨今の大学システムとどうにも相性がよくない。そのうえ、限られたテキストへの沈潜という営為には、幅広くあれもこれもたしなむことを求める総合人間学部の志向ともそぐわない面があるようだ。だが、学問の核心的方法の開示という厳しくも根源的な教育を、〈学際〉や〈幅広い学び〉の名のもとに、手放してしまってよいものか。私の煩悶も試行錯誤も尽きることはないが、研究者・教員としての私にとって、自らの依拠する基盤そのものを疑わざるを得ないこの状況こそ、総合人間学部という〈枠のない場〉がもたらす恩恵であるには違いない。

（しおつか しゅういちろう）

連載企画 「総合人間学とわたし」

学問連携へのささやかな試み

加藤 眞 (自然科学系)



総合人間学は、人間存在を総合的に理解することであるとうたわれているが、私はそれを実践しているだろうか。生態学という学問分野に身をおいている私は、自ずから

環境や自然保護というテーマにおいて社会とかかわりがあり、それなりの活動も行っている。しかし、総合人間学と言えるようなものを経験したことがあるとしたらそれは、さまざまな学問分野の友人ととことん議論し、学問分野の越境をも無謀に試みていた学生時代だったかもしれない。人と自然のかかわり方のような複雑な問題を解決するために学問はいかに貢献できるのかという、未熟ではあるが真剣だった、議論と苦闘の日々を振り返ってみたい。

1970年代から1980年代にかけて、高度成長の途上にあった日本は、その一方で公害問題で苦悩していた。大気汚染や水質汚染が進み、そのための健康被害も顕在化していた。不知火海沿岸で発生した水俣病が社会的関心を集めていたのもこの頃である。海が死に、人が病み、地域社会が崩壊してゆく…。この時代、学問は問われていた。いったい学問に何ができるのかと。

水俣では、石牟礼道子さんが呼びかけ人となり、水俣病に苦しむ人々と地域社会を前にして、水俣病とそれが発生した社会を問うことをめざした水俣病総合調査団が結成された。医学、社会学、歴

史学、民俗学、哲学、生物学…、それぞれの学問が狭い枠から身を乗り出し、学問の垣根を超えて議論し合い、問題解決の道をさぐる。この総合調査は、参加した研究者間の衝突や葛藤を内包しつつも、学問の連携の可能性を示唆するものとなった。この総合調査の結果は『水俣の啓示』と題された報告書としてまとめられている。

生態学を学ぼうとしてこの大学に入学した私は、京都府美山町にある芦生演習林に何度も通うようになった。芦生には手つかずの自然が残っており、植物も昆虫も、魚もサンショウウオも、木の実もきのこも、実に多様で豊富だったからである。ブナとスギが優占する原生林と、その森から湧き出す溪流、そしてその流れを抱くようにトチやカツラが繁茂する溪谷林。1000メートルに満たない低標高の地にこのような原生林が残っているのはまさに奇跡だった。

私が大学院に進学するころ、この芦生演習林の中にダムを建設しようという計画が発表された。このダムは、演習林内に上部ダムを、福井県側の名田庄村に下部ダムを造り、それを巨大なパイプで連結する揚水ダムであり、当時計画中であった大飯原子力発電所3・4号炉の夜間余剰電力が揚水に使われるということであった。「あの美しい森と清流がダムによって失われる」という危機感と怒りに突き動かされて、農学部の友人たちとともに「芦生の自然を守る会」を立ち上げた。さまざまな活動・運動をするうちに私たちは、自然と人のかかわりだけでなく、学問と社会とのかかわりや、

大学と地域社会とのかかわりについて、否応なしに考えさせられるようになる。ダム計画の背景には、日本のさまざまな問題が複雑にからみあって横たわっているのがわかってきたからだ。こうして、始まった研究会が芦生ゼミである。

芦生ゼミにはさまざまな分野の大学院生が参加し、さまざまな話題が紹介され、自由闊達な議論がくりひろげられた。テーマはそれぞれが研究室で行っている研究では必ずしもなく、本人の最重要関心事であることが多かった。原生林の価値、自然の保護、山村の過疎問題、ダムが生態系や地域社会に与える影響、原発の危険性、渚環境の危機、琵琶湖総合開発の問題点、石垣島白保の空港建設計画の是非、研究者の社会的責任……。それらは大学の講義ではほとんど触れられることがないテーマだったが、それ故に新鮮であり、また真剣だった。当時は原発の建設ラッシュで、反原発など言おうものなら非国民という雰囲気があった。チェルノブイリ原子力発電所の爆発がそのころ起こったが、その事故の深刻さがわかってくるのは事故のずっと後である。

全国にダムや原発が建設されてゆく中で、芦生のダム計画はなかなか進まなかった。その一番の理由は、芦生演習林の入り口にある芦生の村が、この計画に絶対反対を唱えていたからである。芦生の村はわずか14戸の小さな村であるが、「芦生なめこ生産組合」を作り、山菜の漬け物加工に成功し、経済的にも自立して活気に満ちていた。この組合を作った井栗登さんは、由良川の最奥の家に住んでおり、芦生の自然があってこそこの幸せな暮らしができるのだという信念を持っていた。私たちは何度も芦生の村に通い、つつましくも勇壮な山のなりわいや数奇なる村の歴史について教えていただいたばかりでなく、頭でっかちの考え方をしばしばたしなめられた。芦生にはかつての小学校（知井小学校芦生分校）の建物が残っており、生徒はもういなかったが、秋になると毎年、村民

全員で文化祭（村民総出演の劇）を行っていた。小さな山村がダムに反対できるその力を、私たちはその文化祭に垣間見たのである。

芦生ゼミはダム計画を阻止するためにさまざまな活動を行ったが、ダムを造ろうとする力は巨大で、私たちの活動などほとんど無力ではないかと絶望しかけていた。せめて、芦生ゼミで得られた成果をまとめようという機運が高まり、芦生の自然の価値、ダム計画とその背後にある原発の問題点、山村の生活とそこで暮らす人々の姿などを紹介した冊子を作り自費出版した。『トチの森の啓示』と題したその冊子は、今から考えれば、学問を連携させようとするささやかな試みの記録でもあった。

2005年、幸いにも、芦生のダム計画は撤回されることになった。地元の反対の声がこの稀有な判断に強く影響したのだろう。しかし、そのころから、また別の問題が顕在化してくる。山村の過疎のいっそうの進行と、狩猟者の減少に伴うシカ密度の急増である。芦生の林床植物はシカによって食い尽くされ、下層植生の喪失は土砂の溪流への流入を増大させた。芦生演習林（現在では芦生研究林と改称）では、シカ柵を作って、せめて森の一部だけでもシカの食害から守ろうという取り組みが続けられている。

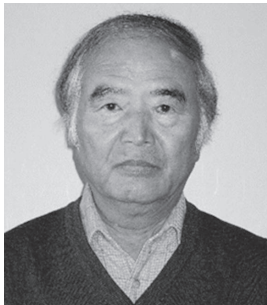
自然と人との関係は常に変化してきたはずではあるが、その変化は近年、自然を不可逆的に荒廃させる方向に急速に向かっており、水俣や芦生だけでなく、福島、川内、伊方、上関、辺野古、高江など、日本各地で予断を許さない状況が続いている。守るべきものは何で、それはなぜ守るべきか、そしてそのためにどうすればよいのか。そのような問題は人間存在と深く関連しており、総合人間学が、そしてさまざまな学問の連携が、問題解決に貢献できる可能性があるにちがいない。

（かとう まこと）

外から見た「総人・人環」

第二のふるさと吉田南

岡田 敬司（京都光華女子大学教授）



総人・人環というより、その前身の教養部を含めて吉田南は、学生時代から定年退職後の今に至るまで、私の心のよりどころであり続けています。そこで過ごした時間の長

さがその理由でしょうが、もっと正確にはその時間の濃さだったと思います。学生時代に限れば、入学から3年間の理学部生のとき、特にその教養部S1クラスの2年間は、その後の転学部後の教育学部生のときの7年間よりずっと短いのですが、密度が上回っていたように思います。

67年、68年は何よりも政治の季節の幕開けでした。ベトナム反戦運動と大学の産軍学協同路線阻止は時の学生世代に対して課せられた歴史的使命のように思えました。これは私だけの心情ではありません。教養部の数多くのクラスでそうした趣旨のクラス決議が為されたのです。当時は各党派間の内ゲバなるものが続発する時期が後に続くなどとは夢にも思わず、右も左もクラスで論戦を交わす幸せな時期だったのです。

今思えば、濃く感じられた時間はこの高揚感、幸福感が反映したものであり、逆に希薄な7年の時間は何とも言えない時期の鬱屈した暗い気分の反映だったのです。

教養部教官になってから何回か部長の指示で「授業防衛」のためにチームを組んでセクトの学生

のクラスオルグを阻止しましたが、何とも身の振り方の違いの大きさに今昔の感があります。

もっともそんな私でも、人環の院生の研究室使用について、専攻長の誰かが「学生による占拠を避けるために、自分の指導院生に、部屋使用が決して権利ではないことをよく言って聞かせなさい」と命令してきたときには、「何を馬鹿なことを言っているんだ!」と声を荒げたことを覚えています。雇われの身になったとは言え、身内の学生院生には健全な権利主張のできる人間であってほしかったのです。セクトの学生には残念ながら、もはや親近感を感じなくなっていたのです。

以上は内から見た、あるいは記憶をたどった吉田南です。4年前に定年退職して以来、市内の女子大に雇われて今に至りますが、今度はこの立場から吉田南を見てみましょう。

自分のゼミの学生がかわいいのは京大でも女子大でも同じですが、京大の場合はどうしても研究者の卵という物差しで測ってみてしまいがちであつたのに対して、今の女子大では人柄、性格の良さで測りがちです。研究者になる学生がいないのだから当然ではありますが、それでも教師の宿痾か、勉強のわずかな出来不出来で差をつけてしまう癖は直りません。この癖を悪癖と思わずに居れた吉田南は、果たして教師にとって良い環境だったのか悪い環境だったのか、よく分かりません。今の女子大では「できない学生」の存在が

はっきりとこの癖の「良くない」ことを分からせてくれるのです。

人環の研究者養成の力量は他の研究科に比しても十分に誇れるものです。このことは総人・人環に在職中から感じていました。吉田南の教員の欠員を埋めるとき、他研究科出身者に人環出身者が勝つことが多かったからです。

今、文系研究者の職探しは冬の時代です。私のいる女子大の教員募集なども貴重な資源ですが、ここしばらく珍しくなってしまった文系教員の公募で四つの席の内の二つを人環出身の女性研究者が占めました。(もっともそのうちの一つは募集そのものが事後に取り消されてしまったのですが・・・)。

大学は元来、学芸の面で秀でた人材を育成するところでしたが、今日のように大学の大衆化が進行すると、そうとばかり言っておれなくなりました。すべての人が知的エリートとなることはすばらしい目標かも知れませんが、エリートの定義からしてあり得ないことです。今日の大衆化した大学の目標がエリート養成から教養ある労働力の育成にシフトしたのも当然のことです。

私のところを含めて多くの大学、特に私学が専門学校的な実学志向の学部、学科中心の構成に変わってきました。それでもかつてのように教養課程がしっかりしていれば、教養ある労働力の育成という大学の体面は保てるのですが、近年の政府・文部科学省の安上がり路線の推進のせいで、教養教育の崩壊は無残な姿をさらけ出しています。大学とは名ばかりになりつつあります。

こうした日本の大学の現状に鑑みれば、京大の吉田南の制度、つまり豊かな教養ある専門学生を育成する教養教育・学部教育・大学院教育の総合体制は大変貴重なものです。おそらくそれは京大

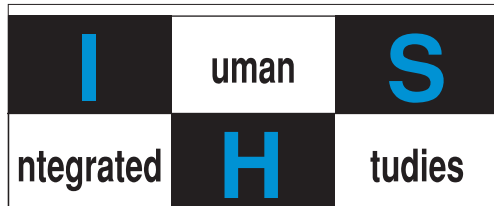
がエリート養成大学であるから保持し得ている特長でしょう。全大学への一般化は所詮無理でしょう。

しかし一つでも二つでも理想に近い見本があることは、大きな意味を持ちます。いつでも比較可能だからです。大学の全般的な体制がうまくいっているときには更なる反省点を、行き詰まったときには大きな変革の道標を提供してくれるのです。

もちろん吉田南がそうしたものであるためには、たゆまぬ反省と改良をし、またときには頑固きわまりない保守性をも発揮し続けなければならないでしょうが・・・。

(おかだ けいじ)

京都光華女子大学教授(教職担当)。京都大学名誉教授
パリ第8大学第3課程博士(教育科学)。専門は教育関係論 自律論。兵庫県立姫路短大講師、京大医療技術短大部助教授、京大教養部助教授、総合人間学部教授(平成6年4月)、人間・環境学研究科教授(平成15年4月)、平成25年3月定年退職、同年4月より現職。主著として『かわりの教育学』、『自律の復権』(共にミネルヴァ書房)『共生社会への教育学』(世織書房)などがある。



編集後記

◆『総合人間学部広報』第58号をお届けいたします。ご退任を迎えられる8人の先生方の長年に渡るご尽力に心から感謝申し上げるとともに、先生方の今後の益々のご活躍を祈念いたします。頂戴したメッセージを拝読し、残され

た私たちの責任を改めて痛感します。「外から見た総人・人環」には岡田敬司先生に寄稿いただきました。また新連載企画として「総合人間学とわたし」がスタートしました。総合人間学とはどのようなものだと考えているのか、その確立と発展に自分の専門分野からはどのように貢献できるのか、といったことを先生方に自由闊達に述べていただいて、その先に目指すべき総合人間学の姿を明確に浮かび上がらそうという狙いです。寄稿いただいた3人の先生方、ありがとうございました。以降の連載にもどうぞご期待下さい。(F・K)



人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会